

52 週 スタディ

ハイデルベルク

教理問答 金洪晩著

ハイデルベルク 教理問答書の 歴史的背景と 構造及び実践

ハイデルベルク教理問答書は、改革教会信仰告白の標準文書の中で一つです。「キリスト教綱要」が、宗教改革、第一世代の重要な作品というならば、ハイデルベルク教理問答書は、その性質と内容の面において宗教改革の第二世代作品と言えます。「キリスト教綱要」とハイデルベルク教理問答書は、使徒たちの教えを、その時代にもう一度説明し、強調したこととして重要性を持ちます。

ハイデルベルク教理問答書は、宗教改革がヨーロッパに拡散される中で作成されました。ハイデルベルク地域は宗教改革が始まった時、宗教改革を歓迎した地域ではありませんでした。しかし1556年オットー・ハインリッヒ伯爵が選帝侯になった以降は変わりました。彼は、始めはルター教の告白を喜んだのですが、後には改革教会に傾くようになります。それで、ハイデルベルク大学の神学教授たちを改革神学者として指名します。そして同時に、彼らによってハイデルベルク地域の教会を見回るようにしました。そのわけで、彼が死ぬ時(1559年)には、改革派説教者がルター教説教者より多かったのです。

フリードリヒ3世が彼の後継として選帝侯になりました。彼は改革教会の礼拝順序を定め、十字架と像等々、ろうそく台と、祭壇等を除去しました。このようなことは、オットー・ハインリッヒの下では改革できなかったことでした。そして、彼は詩篇ソングを導入します。フリードリヒ3世は、神学者として敬虔な者でした。

1560年フリードリヒ3世は、オレヴィアーヌスをハイデルベルクの宮廷牧師として招待します。そして1561年には、ウルジーヌスをハイデルベルク教授と

して招待します。フリードリヒ3世は、学校ごとに教える指針が異なることを発見し、学校で共通に使用できるように教理問答書を作る必要性を悟るようになります。彼はこのことをオレヴィアースとウルジーヌスに一任し、二人の神学者は教理問答書を作成しました。

1563年1月、フリードリヒ3世は、この教理問答書の承認のためにハイデルベルクの教授たちと牧会者たち、そして地域監督たちで構成された公会に提出しました。ハイデルベルク教理問答書は、この公会において受け入れられ承認されました。教理問答書の作成期間が短かったものの、包括的 [comprehensiveness](#) でありながら正確だったので、みな満足しました。教理問答書は、公的に、ハイデルベルクにあるすべての教会と学校の信仰教育用度として受け入れられました。

オレヴィアース (1536-1587) は、福音の恵みを悟った後、特に法学部を終えた後、改革者たちの神学を勉強し始めます。彼は、ピーター・マター、カルヴァン、ベザの影響を受けました。特に、カルヴァンの作品等を研究しました。そしてベザとは親密になり、その生涯最後まで交際をしました。1559年、彼は、故郷であるトリーアに帰って来て働きを始めます。彼の働きの中で福音の力が現れました。彼は、迷信を助長するヨセフのコートについて反対をし、ローマカトリック教会の迫害によって獄に閉じ込められます。この時、フリードリヒ3世が、彼が監獄から出られるように助けを与えました。

ウルジーヌス (1534-1584) は、1561年フリードリヒ3世の招待によってハイデルベルク大学の神学部教授となり、しばらく経って都市の法廷説教者 [coertpreacher](#) の中で一人となります。彼は、メランヒトンの影響を次第に受けた人物です。彼は、1557年、メランヒトンとヴォルムス会議と一緒に参加しま

した。その後、ジェネバとパリを訪問してヴィッテンベルクに帰って来て講義をします。しかし、彼の正統的な神学はルター教の反対にぶつかることとなります。ウルジーヌスは講師をやめ、1561年にハイデルベルク大学の神学部教授として招待を受けます。彼の説教に卓越的な才能はなかったのですが、学問的な講義は優れていました。

フリードリヒ3世は、この二人に改革信仰の教理問答書作成を要請するようになります。二人が教理問答書を作成し、ラテン語とドイツ語にした教理問答書をハインリヒ・ブリンガーに送りました。そして彼に、「私たちがあなたとスイス改革者たちには多大な負債を負っていることは間違いありません。私たちはこれを一つの資料ではなく、色々な資料を用い作成しました。ただ神にだけ栄光を帰します」と伝えました。

フリードリヒ3世が死に、ルートヴィヒが選帝侯になると、ハイデルベルクに政治的变化が起こります。ルートヴィヒはルター教を強調します。結局、二人はハイデルベルク大学から追放されます。オレヴィアーヌスはヘルボルンに行き、教会を改革する働きを続けます。そこで1578年ガラテヤ書注解書を出版しますが、ベザが序文を書きました。ウルジーヌスはノイシュタットに移し、そこで教理問答書を講解します。彼の講義が編集され、彼の死後（1584年）ハイデルベルク教理問答書注解として出版されました。

ハイデルベルク教理問答書は、ハイデルベルク地域に改革信仰を建てようとする目的で作成されました。しかし、ハイデルベルク教理問答書は、ただ、教理の体系だけではなかったのです。教理が、生活という形態の中で説明されています。ハイデルベルク教理問答書は、人間の自然的な状態が悲惨という事実から始まって、栄光ある贖い計画を説明し、最後には、大いなる救いの実際の

な実について叙述しています。

ハイデルベルク教理問答書がこのような構造を持っている理由は、福音と救いについて無知な者たちを目覚めさせるためです。真の救いの恵みによる体験は、自分が罪人ということを経験することから始まります。そのような罪人は、必ず赦しの方法を探ようになります。赦しを求め、救いの恵みに飢え乾く選ばれた罪人は、結局、神の恵みのゆえにキリストにあつて赦しを体験します。そのように赦しを体験した罪人は、自分の罪を憎み、罪と戦い、より一層神の戒めを守るようになります。

ハイデルベルク教理問答書は、直ちにこのような過程を説明します。それゆえ、大変福音的で、実際に霊魂が覚醒されていく過程を説明しています。ハイデルベルク教理問答書のこのような特徴は、今日にも、相変わらず教会の中で、霊魂を覚醒させる良い教材として用いられるのに充分です。

ハイデルベルク教理問答書のもう一つの特徴は、ローマカトリック教会の誤りに対して鋭く責めているところです。質問 80 番の場合は、ローマカトリック教会から攻撃を受けた質問です。このようにハイデルベルク教理問答書は、教理上の誤り等を指摘しながら、また一方では正統的な教えは何かを明確に見せているのです。このような特徴からしてハイデルベルク教理問答書は、改革教会全体の中で広く受け入れられました。スイス、フランス、英国、スコットランド、オランダの改革教会においても使用されました。

すべての牧会者は、毎年ハイデルベルク教理問答書を、主日 (52 週) 説教するようになっていました。勿論、学校と大学でもハイデルベルク教理問答書を教えるようにしました。ハイデルベルク教理問答書はこのような目的で作られました。ハイデルベルク教理問答書を通して、すべての教会に定期的な教理教育

システムが建てられました。毎主日午後には、子供を含めた全信者がハイデルベルク教理問答書の講論を聞きます。

このような方式は、今日も適用可能です。オランダ改革教会の場合、以前と同じような方式で教理問答書を使用しています。より具体的にハイデルベルク教理問答書の有用性を申しますと次のようです。

第一に、ハイデルベルク教理問答書は、教会で子供を含めた青少年と青年たちを教えるのに、これ以上ないと言えるほど素晴らしい教材です。信仰の体系を説明するのに大変使いやすく、もっと進んで、重要な聖句を記憶させようとする時に有用です。ハイデルベルク教理問答書は、聖霊の御業を前提にしているから、ただ知的な、知識習得だけで終わることなく体験的です。従って、子供たちと青少年と青年たちが聖書聖句を記憶し、その土台の上に聖霊の御業が行われれば、より間違いなく、正しい信仰の体験が起こることでしょう。

第二に、家庭で父母が子供たちを教えるのに良い教材です。質問と答えとで構成されているので、質問を読み、その答えについて行けば、根拠聖句を一緒に探し読ませることができます。この時父母は、項目ごとに不足を補う説明をしてあげれば良いです。教理問答書の根拠聖句は重要な聖句ばかりです。子供たちに聖書全体を理解させるのに相当な助けを与えられます。

第三に、ウルジーヌスが教理問答書注解書を書きながら意図したように、神学生たちのために神学教科書としても用いることもできます。神学を研究する神学生には、これ以上ないほど素晴らしい教材です。かつ、牧会者自身にも有益です。ハイデルベルク教理問答書を用いることで、より簡略かつ体系的にも、信仰の構造について説明することができます。そして、教理説教と神学講論のために体系を立てるのに有用です。このような側面から、ハイデルベルク教理問答書は、指針書の役割をします。

ハイデルベルク教理問答書は、卓越した構造を持っています。真の福音的信仰 [true evangelical faith](#) は何かを説明する構造に組み込まれています。

質問 1、2 番は、信仰と救いの重要性を語る、序論に該当されます。質問 3-5 番は、人間の全的墮落と腐敗について説明していて、質問 6、7 番は、人類の全的墮落に対する確証を扱っています。質問 8 番は、罪が人類全体に及ぼされた影響を説明します。質問 9-11 番は、神の聖なる法に従って審判を受けるしかない罪人の状態について語っています。このように、質問 3-11 番までは、ハイデルベルク教理問答書の第一部に該当されるものとして、罪による人間の悲惨さを説明しています。

質問 12-18 番までは、アダムにあってすべての人類が罪人となりますが、選ばれた罪人を贖うために神がキリストを備えられた真理について説明しています。質問 19 番は、福音が、キリストに対してのことだと説明します。しかし、すべての者がキリストを受け入れるわけではありません (質問 20 番)。ただ信仰によってキリストの恩恵を味わえるのです (質問 21 番)。質問 22, 23 番は、このような信仰は、キリスト教教理についての理解を含めるべきだと説明しながら、それは使徒信条に簡略に表現されていると語ります。

結局、使徒信条は、三位の神が罪人を贖われる御業に対する説明です。御父については質問 25-28 番、御子と私たちの贖いについては質問 29-52 番、聖霊とその清くさせる働きについては質問 53-59 番が扱っています。そして、宗教改革において、最も確信的な教理である義認についての質問は 60-64 番で説明しています。質問 65 番は、このような信仰を発生させる手段として、福音説教について語っています。質問 67-85 番は、聖礼典を扱います。ハイデルベルク教理問答書全体の、三つの部分の中で 12-85 番までは第二部であり、恵みに該当されます。

質問 86-129 番までは全体内容の中で、第三に該当する部分として、新生した者から出て来る実について説明しています。新生した者には、必ず良い行いが出るようになっていきます (質問 86-87 番)、質問 88-90 番は、回心についての説明です。質問 91 番は、良い行いの性質について説明していて、92-115 番までは、新生した者に要求される、当然の行い原理である十戒についての講論です。質問 116-118 番は、新生した者に、重要な恵みの手段である祈りについて説明していて、質問 119-129 番は、祈りの模範である主の祈りについて説明しています。このように第三部は、新生した者に表れる敬虔の特徴等を扱っていて、救いの恵みに対する感謝が、生活の中で、どのように実現されるかについての説明です。

ハイデルベルク教理問答書の構造から調べられる特徴は、同じく一様に福音的です。霊魂を目覚めさせる面からして、改革教会が持っている貴重な霊的遺産とも言えます。今、この時代において霊的覚醒の道具としても不足はありません。